

公園内で見られる植物

写真は6月13日(土)
自然観察会で見られた
植物です



ヤマツツジ (ツツジ科)

緑の葉の中の赤い(花)色のコントラストは、今の季節とても目を引きます。花の中央にある濃い色の模様は、虫に蜜の位置を知らせる誘導路とされています。

1年を通して葉が付いているように見えますが、実は春葉と夏葉があり、春につき秋に落ちる葉を春葉と言い、夏から秋にかけて付き越冬する葉を夏場と言います。面白いですね。



クマノミズキ (ミズキ科)

ミズキ (水木) というのは水分量の多いことから来た名で、三重県の熊野で発見されたことから、クマノミズキという名が付いたとされています。花も良く似ていますが、ミズキに比べて1か月ほど後に淡い乳白色の花をたくさん付けます。決定的に違うのは葉の付き方でミズキ科は本来対生の木が多く、クマノミズキも対生ですが、ミズキの方が互生です。



ナツハゼ (ツツジ科)

葉に荒い毛があり、触るとざらつきます。実には、牛の額の模様があり、出雲地方では「牛のヒタイ」と呼びます。良く熟すと甘くなりますが、酸味はけっこう強いです。山歩きされる方が好んで食べられたようで、山のブルーベリーと言われています。名前の由来は夏の頃からハゼのように紅葉するという意味です。



ササユリ (ユリ科)

葉が笹に似ていることからこの名が付いています。白い花は美しく他のユリより気品があるように思います。つぼみの時はより淡紅色で清楚な感じがします。芳香もあります。近年、採取されることが多く、場所によっては見られなくなっています。



ネズミモチ (モクセイ科)

名の由来は、黒く熟した果実がネズミの糞に似て、葉がモチノキに似ることから付いたといわれています。花には芳香があり、たくさんの花を付ける事から、道を歩いても風によって香りが漂ってくる場合があります。



イソノキ (クロウメモドキ科)

稲を束ねるワラを「ユイソ (結いそ)」と呼び、しなやかな枝を結束に使ったことから、ユが省略されイソノキとなったとか?若い枝は褐色ではじめは毛があります。実はあまり目立ちませんが、のちに赤くなり熟すと紫黒色に変わりよく目立ちます。葉の付き方に特徴があり、左右2枚ずつ交互 (コクサギ型) に付くことがあります。



ヒョウタンボク (スイカズラ科)

スイカズラに似た木。赤い実が2個ずつ対になっているのがヒョウタンに見えることからこの名前が付けました。とってもかわいらしい実ですね。2個ずつ対になって咲いた白い花が、実になります。花の色が白から黄色に変わっていくため「キンギンボク」とも呼ばれます。



ウツボグサ (シソ科)

花穂の形が「うつぼ」という矢を背負って入れる鞆（うつぼ）という道具に似ていることから付けられました。生薬で夏枯草（カゴソウ）といいます。



クリ (クリ科)

公園内にはあちらこちらにクリの木があります。猫じゃらしのように見えるのは全て雄花です。基部に緑色の総苞の中に3個ずつ雌花が入っています。